

日本初リジエネラティブ・オーガニック認証を取得！
仁井田本家 様、パタゴニア日本支社 様が
市長を訪問します



2026年1月21日

郡山市農商工部

園芸畜産振興課

課長 結城 弘勝

ターゲット 2.3 TEL : 924-3768

SDGs ターゲット 2.3 「小規模食料生産者の農業生産性及び所得を倍増させる」

仁井田本家では、日本で初めてリジエネラティブ・オーガニック認証を自社水田で取得しました。

今回、認証取得の報告と同取組を紹介するため、仁井田本家代表取締役及びパタゴニア日本支社インパクトディレクターが市長を訪問します。

1 日 時 1月27日(火) 11時00分

2 会 場 市役所秘書課応接室（本庁舎2階）

3 訪問者 有限会社 仁井田本家 代表取締役 仁井田 穏彦 様

パタゴニア日本支社インパクトディレクター 近藤 勝宏 様

4 対 応 郡山市長

農商工部理事

【有限会社 仁井田本家】

創業1711年。自社田の自然栽培での米作りをはじめ、全量自然米100%・純米100%・自然派酒母100%の酒造りの他、米の発酵食品の製造販売。

【リジエネラティブ・オーガニック認証】

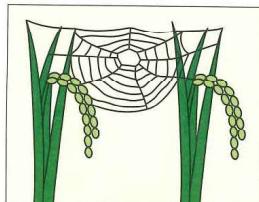
リジエネラティブ・オーガニック認証は「土壤の健康」「動物福祉」「社会的公平性」の3つの柱で構成され、既存の有機認証を基盤とする世界最高水準の全体論的な認証。気候危機や土壤劣化、生物多様性の喪失、工場型畜産、地域経済の分断などに対応するためにパタゴニアなどが2017年に創設。

この認証に基づく農業を「リジエネラティブ・オーガニック農業」と呼び、農地の立地や気候、文化的背景を踏まえたシステムアプローチで、土壤や農場全体の生態系の再生に焦点を当てた実践の集合体。

リジェネラティブ・オーガニックな水田稻作システム

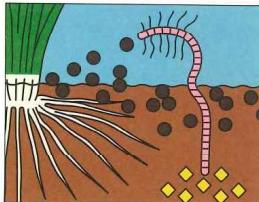
伝統的な水田稻作の仕組みを元にした、
リジェネラティブ・オーガニック水田稻作システムは、
周辺環境や生き物とのつながり、
生態系への配慮、自然共生性にあふれ、
優れた自然環境維持基盤として機能します。
また、畑作とは異なる特徴があります。

1. オーガニックで生態系の回復を支える



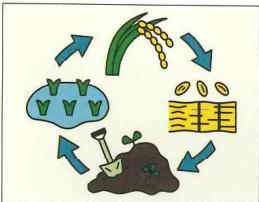
オーガニック農法は、化学的に合成された肥料、農薬、遺伝子組み換え技術を使用しません。農地の生き物を育むとともに、農地内外の生態系の回復を支えています。また、水質汚染の防止や地球温暖化の緩和に貢献します。

2. 土壤が劣化しにくいシステム



水を張ることで土壤が侵食されず、有機物の分解が抑制されるなど、水田は土壤劣化が起こりにくい持続的なシステムです。地域や農地ごとにその性質は異なるため、土地の伝統的な手法を頼りに、目に見えにくい生態学的な働きを活かすことが望ましいとされています。

3. 循環によって地力を維持する



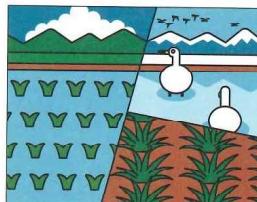
水田から生み出された有機物を還元すると、水田の地力を維持します。しかし、有機物が分解しないうちに水を張ると、メタンガスをより多く出すため、注意が必要です。堆肥にしたり、秋や春の温度が高いうちにすき込んだり、有機物を分解してから湛水することで、メタンガスの発生を抑制できます。

4. 畦畔は生き物たちの棲みか



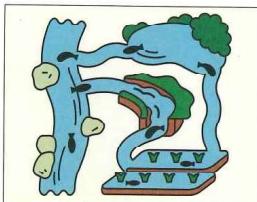
畦(あぜ)や畔(くろ)とも呼ばれる「畦畔(けいはん)」とは、田んぼや畑の周囲の土を盛り上げた部分。プラスチックマルチやコンクリート化せず、草が生えた状態を保つことで、両生類やチョウ類、昆虫や植物など、水田生態系の生き物たちの棲みかになります。棚田の石積みも生き物の貴重な生息場所となっています。

5. 植物や水で被覆して土壤を守る



稻作期間はイネと水によって覆われるため、土壤の劣化を予防できますが、稻作をしていない期間をどうするか? 冬季湛水や早期湛水、湿田として湿地特性を活かすなど土壤を守り、生物多様性の上でも効果があります。地域によっては、ニ毛作やレンゲなどの綠肥の活用といった方法も伝統的に行なわれています。

6. 生きた水のネットワーク



河川や土水路、ため池など、様々な水域を結ぶことで成り立ってきた伝統的な水田システム。それらを産卵や生育の場とする生物種は多く、生き物たちの移動経路でもあります。単なる物理的な水の流れに留まらない「生きた水のネットワーク」にするには、水の連続性と連結性が重要です。

7. 一帯がモザイク景観となるように



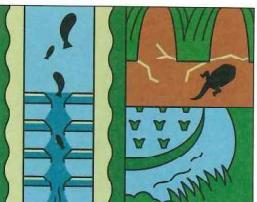
イネの品種(早生・晚生など)や稻作のタイミングが異なることで、水田ごとの湛水時期や環境が一律でなくなり、地帯全体を俯瞰するとモザイク景観が構成されることになります。多様な環境がモザイク状に存在する、いわゆる「モザイクハビタット」は、地域全体の生物多様性に貢献します。

8. 周辺環境とのつながりの上に



水田の健全性は農地だけで維持されているのではありません。水源となる林や森、河川や用水路まで含めて捉え、管理する必要があります。水田の生き物にも、周辺の林や草地、水路やため池を利用している種が多くいます。それらの生態や生活史を考えれば、水田システムや水田生態系とは広い時空間の上に成立しているとわかります。

9. 地域のバックグラウンドを考慮して



水田の土地履歴や土壤の種類、その水田システムの生い立ち・成り立ち、伝統的な使い方は、地域ごとに異なります。後背湿地の水田地帯が谷津の棚田など、水利のあり方も地域によって様々。魚道や温水路・江の設置、冬季湛水、生き物に配慮した中干しといった取り組みは、地域のバックグラウンドを考慮して行なわれています。

オーガニック農業

リジェネラティブ・オーガニック農業 リジェネラティブ農業の違い

オーガニック農業(有機農業)

国際的な委員会での定義: 有機農業は、生物の多様性、生物的循環及び土壤の生物活性等、農業生態系の健全性を促進し強化する全体的な生産管理システムである。日本の法律による定義: 「化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと並びに遺伝子組み換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷ができる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業をいう。」と定義されている。

リジェネラティブ・オーガニック農業 (リジェネラティブ・オーガニック認証に基づく)

リジェネラティブ・オーガニック認証は「土壤の健康」「動物福祉」「社会的公平性」の3つの柱で構成され、既存の有機認証を基盤とする世界最高水準の全体論的な認証。気候危機や土壤劣化、生物多様性の喪失、工場型畜産、地域経済の分断などに対応するために2017年に制定された。この認証に基づく農業を「リジェネラティブ・オーガニック農業」と呼び、農場の立地や気候、文化的な背景を踏まえたシステムアプローチで、土壤や農場全体の生態系の再生に焦点を当てた実践の集合体を指す。真に「リジェネラティブ」であるためには、農業システム内のすべての要素——土壤の微生物群から動物、労働者に至るまで——を考慮する必要があると考える。農地での具体的な取り組みは「リジェネラティブ・オーガニック農法」と呼ぶ。

リジェネラティブ農業 (環境再生型農業、再生農業など)

世界で急速に広がっているリジェネラティブ農業は、土壤への炭素隔離を促進するために、土壤の健康を高めることを目的とした特定の実践(農法)にのみ注目している場合が多く、農薬や遺伝子組み換え技術の使用が禁止されているわけではない。農法に関する議論に終始し、社会的公平性に関する主張や基準は含まれていないことがほとんどである。また、法的な定義や既存の認証制度を基盤とせずに、様々な組織や個人による主張・定義が可能であるため、誰でも自由に、自由な解釈やビジョンに基づいて使用・主張することができる。その特性ゆえに、同じ言葉であっても内容は千差万別となり、どのような考え方や実践の項目・程度・枠組みに基づいた主張なのかを確認することが望ましい。